

2007年度（平成20年3月）

東北大学文学研究科研究年報 第57号（別冊）

双生児の親密さとアイデンティティ

— 神話と事実 —

仁 平 義 明
大 平 直 子

双生児の親密さとアイデンティティ

—神話と事実—

仁 平 義 明
大 平 直 子

要 約

従来、双生児は他のきょうだい関係とはちがって、並外れた親密さを有するなどの特殊な関係にあることが、ごく当たり前のように仮定されてきた。また、そうした関係が、双生児には、一人の独立した人間であるというアイデンティティの形成の障害になることが仮定され、臨床的なケースも報告されてきた。われわれは青年期にある双生児間の親密さの構造とアイデンティティ形成の特徴を非双生児きょうだいや親しい友人間の関係の特徴と比較する目的で質問紙調査を行なった。そのために、特に親密な関係を分析することを想定した「親密な関係尺度」を作成した。対象は、27人の一卵性双生児、18人の二卵性双生児、50人の兄弟姉妹、50人の友人同士の研究参加者であった。調査の結果、尺度の因子分析からは、「親密さ」「競争」「分離欲求（束縛感）」「アイデンティティの希薄さ」「相手への共感」という5つの因子が抽出された。それらの関係因子得点から見ると、①男性一卵性双生児、②女性一卵性双生児、③男性二卵性双生児、④女性二卵性双生児、⑤男女二卵性双生児という5種類の双生児関係は、それぞれの間で異なる独特な関係であり、きょうだい関係とも友人関係とも異なる性質を持つことが明らかになった。また、これまで双生児に関する論文の著者たちが主張していた傾向とは逆に、本研究の結果は、双生児のアイデンティティは相対的に確固としたものであることを示していた。むしろ、双生児が個として成立するためにはアイデンティティが強固に確立されていることが必要だったと考えられる。とはいえ、アイデンティティが確固としたものであることは、独自の一人の人間であろうとする双生児の個人化の過程が容易であったことを必ずしも意味しないで、逆にその過程が困難であったことを示唆しているともいえる。さらに、本研究に基づいて作成された尺度（付録）は、双生児・きょうだい・友人・恋人など親しい関係をみるための尺度「親密な関係尺度」として使用範囲の広いものであると考えられる。

はじめに

双生児研究の中で「双生児法」は、さまざまな特性や能力がどれだけ遺伝規定性が強いのか、遺伝性係数を算出するための方法である(安藤, 1999)。双生児法は、同じ家庭で育った(それゆえに環境要因の影響を共有する割合の高い)一卵性双生児と、片方が発達初期に養子に行き別な家庭で育った(それゆえに環境要因の影響を共有する割合の低い)一卵性双生児の比較、同様な二卵性双生児、きょうだいの比較などから、遺伝要因の寄与率を算出する方法である(たとえば, McCartney, Harris, & Bernieri, 1990)。これは、「方法としての双生児研究」だといえる。心理学のデータベースから「twin」をキーワードにして研究を検索すると、そのほとんどが「方法としての双生児研究」あるいは双生児の類似性研究である。

それに比べると、「双生児であること」(twinship) そのものの、どのような心理学的意味を持っているのかについての研究、いいかえると「目的としての双生児研究」は、それほど多くはない。双生児であることがどのような意味を持っているかの研究も、どちらかといえばケース分析に依存する傾向があり、定量的に特徴を明らかにした研究は少ない。また、その少ない研究も、双生児に対するステレオタイプの見方の影響を受けている。とくに、双生児のアイデンティティ(identity)形成については、その傾向が著しい。

たとえば、彼女たち自身が一卵性双生児でもある Barbara Schave と Janet Ciriello(1983) は、こう述べている。

「双生児は、これまで神話や世界中のさまざまな書物の中で、象徴的なかたちで描かれてきた。双生児同士は、互いに反対のもの、コピーのような同じもの、一つの全体の半分、あるいはふつうとは変わった奇妙なものとしてみられてきた。」

本論文は、双生児の関係を実際の調査資料から詳細に分析し、双生児がじっさいに独特な関係にあるのか、またこれまで仮定されてきたようなアイデンティティの特徴を持っているかどうかを明らかにしようとしたものである。

1. 従来の双生児のアイデンティティ研究

1-1. 双生児という状況の特殊性の例証

双生児関係は、他のきょうだい関係に比べると独特である。幼い頃から一緒に過ごすこ

とが多く、二人のコミュニケーションは特別に密なものになる。だから、双生児の言語発達やコミュニケーションには他の子どもとは異なる特徴が生じる。Savić (1980) は双生児の言語発達研究をレビューして、次のような特徴をあげている。

- ① 双生児の発話の長さは、双生児ではない子よりも短い。
- ② 双生児の発語時期は、双生児ではない子よりも遅れる。
- ③ 双生児の構音の発達は、遅れる。
- ④ 双生児は、自分を中心とした自己中心的スピーチ (egocentric speech) の割合が少ない。
- ⑤ 双生児は、社会化されたスピーチの発達が遅れる。
- ⑥ 双生児は、文の構成の発達が遅れる。
- ⑦ 双生児は、形容詞、代名詞、感嘆詞を除けば、名詞や動詞など他の品詞の使用の発達が遅れる。
- ⑧ 双生児は、ペアの間でのコミュニケーションに使われる、お互いにしか通じないスピーチ (autonomous speech) をつくりだすことが多い。

双生児の密接な関係、お互いに多くを“言わなくても分かる”状況が、言語発達を遅らせるというのである。

同様に、双生児の記憶にも特徴的な傾向がみられるとする報告がある。双生児のような密接な関係では、相手の経験を自分の経験だと誤って記憶してしまう「記憶の取り込み」が、しばしば起こる (Kuntay, Gulgoz, & Tekcan, 2004)。これは相手の経験と自己の経験の境界の喪失だともいえる。

この二つの指摘は、双生児のアイデンティティ形成には独特な問題が生じるという考え方に繋がっていく。

1-2. アイデンティティという概念

双生児のアイデンティティについて論じる前に、アイデンティティという概念を明確にしておきたい。

ふつうアイデンティティというとき、それは自我のアイデンティティ (ego identity) である。自我のアイデンティティの概念を体系化した Erikson は、自己が、ある同じ統一された一つのものであるという確固とした感覚 (アイデンティティの感覚) を持つことができるかどうかは、われわれの人格のコントロール主体である自我そのものが確かなものとして確立されているかどうか (自我のアイデンティティ) の反映にほかならないと考えた

(Erikson, 1950 ; 1963)。

Erikson の考えるアイデンティティは単純ではないが、次のようないくつかの側面を持つものとしてまとめることができる (仁平, 1992)。

① 〈単一性, 集束性〉

いろいろ異なる側面を持った存在である自分が、それぞれに分裂した存在ではなく、ある単一のものに集束する統一された何者かであると感じられること。

② 〈定義性〉

自分はいったい何者であるか確信をもって定義できること。Erikson は職業上のアイデンティティはしばしばアイデンティティの中核になるとして、こう述べている：

「自我同一性の観念は、過去において準備された内的な斉一性と連続性とは、他人に対する自分の存在の意味—「職業」という実態的な契約に明示されているような自分の存在の意味—の斉一性と連続性に一致すると思う自信の積み重ねである」

(Erikson, 1963 ; 仁科訳, 1977, 336ページ)。

③ 〈帰属性〉

自己の定義をするときに、ある集団に帰属する一員であると感じられること。これは職業に限らず、民族、地域的アイデンティティというあらわれをとることもある。

④ 〈不変性, 連続性〉

ときどきの自分が、その場その場で変化する別個なものと感じられずに、同一の連続した不変な存在だと感じられること。

⑤ 〈独立性, 独自性, 境界性〉

自分が他者と区別がつかない他者との境界をもたない存在ではない、独立した独自の存在だと感じられること

Erikson のアイデンティティという概念の出発点にあるのは、デンマークで生まれドイツで養父のもとで育ち、ウィーンで精神分析に従事し、アメリカに渡って研究者、思想家として自己の道を確認したという、彼自身に内在した事情からしても、“自分は何者であるか”という「定義性」だろう。しかし、双生児のアイデンティティが問題にされる時には、双生児という状況が持つ意味からすれば、「集束性」「定義性」「帰属性」よりは、“自分が独立した一人の人間である”という「単一性」、あるいは他と区別のつかない他者と

の境界が不明確な存在ではなく自分が独自の存在だと感じられる「独自性、境界性」の問題であると考えられる。双生児のアイデンティティ形成では単一性、境界性が障害を受けるとというのが従来の考えだからである。

1-3. 双生児のアイデンティティに関する従来の考えと問題点

双生児のアイデンティティ形成について、それほど多くはないもの、これまでも何人かの研究者がその特徴について述べてきている。

1-3-1. Siemon (1980) の双生児論

双生児のアイデンティティについての典型的な考え方は、Siemon (1980) に代表されるような、双生児の分離-個人化 (separation-individuation) 過程の問題である。

Siemon は、こう考えている。双生児であることの本質は、①双生児同士の同一視 (twin identification)、②双生児化反応 (twinning reaction)、③相補性 (complementarity) にある。まず、双生児は親密な関係ゆえに相互に同一視する傾向があり、一人の人格としての個人化 (individuation) が遅れ、ときには成人期までそれが遷延する。その結果、自分と相手との境界融合が起こる。これが双生児反応である。さらには、“われわれ自己 (we-self)” と呼ぶべき相補性が生まれ、二人がチームとして機能するようになる。その結果、二つのパーソナリティの混合が起こり、自我の境界はあいまいになる。しかし、一人の人間ではありえない双生児が分離し、最終的に個人として生きていこうとすると様々な問題が起こることになる。

じつは Siemon 自身が一卵性双生児であり、その論は臨床的な経験、調査結果だけでなく、個人的経験にも基づいているとしている。しかし、その論では双生児は「twins」とひとくくりにされ、一卵性双生児と二卵性双生児のちがいがいも性差も考慮されていないし、論の根拠になった具体的なデータは明らかにされていない。その意味で、確実な証拠を提示しない思弁的なモデルにとどまっていといえる。

1-3-2. Ainslie (1985) の双生児論

Ainslie (1985) は、一卵性双生児と二卵性双生児のケース研究から、双生児のアイデンティティ形成には問題が生じやすいという主張を行なっている。双生児では自-他表象がじゅうぶんに分化しないこと、いかえればアイデンティティ確立の脆弱さがさまざまな問題を生じる。一つは双生児の相互依存性である。その依存性は、さらに分離不安と相互

同一視としてあらわれる。分離不安は、青年期以降に相手との地理的分離や結婚による分離の際に、自己の一部を喪失したような感情を伴う。また、同一視は、誰かが双生児のもう一人を非難したときに自己が非難されたような感情を生じさせる。もう一つは、ユニット化である。これは、自分が双生児という不可分なユニットの部分であるという感覚である。自分は一つの全体の部分であるという感覚は、自分単独では一つのパーソナリティの半分でしかないという感覚を起こさせる。あるいは、たとえば自分は衝動性を相手は熟慮性を分担しているというような、両極化の感覚を生じることもある。

Ainslie は、双生児のアイデンティティの形成に生じる問題をこのように述べている。しかし、これもケースを自分の論の補強部品としてつないでいくというスタイルの論述になっており、定量的な資料による裏づけが不足している。

1-3-3. Schave & Ciriello (1983) の双生児のアイデンティティ・タイプ論

Schave & Ciriello (1983) も、自分たち自身がそれぞれ一卵性双生児の一人である。彼女らは、20ペアの一卵性双生児と20ペアの二卵性双生児の面接調査に基づいて、双生児のアイデンティティには、次のような特徴的な6つのタイプがあると主張した：①ユニット・アイデンティティ (unit identity), ②相互依存的アイデンティティ (interdependent identity), ③分裂 (分担) アイデンティティ (split identity), ④理想化アイデンティティ (idealized identity), ⑤競争的アイデンティティ (competitive identity), ⑥きょうだいのアイデンティティ (sibling attachment identity)。

① 「ユニット・アイデンティティ (一体化アイデンティティ)」 (unit identity)

これは、二人の自我が一つのものとして機能しているような状態である。相手と自分は不可分な一つの部分であり、同じであることをつねに希求する。一卵性双生児のうち3ペアがこれに相当した。一組はホロコーストの生存者だった。彼女たちは、“私は誰といるよりも、姉 (妹) といる方が、安心できる” と述べたと報告している。

② 「相互依存的アイデンティティ」 (interdependent identity)

このタイプの双生児は、お互いに別個な人格であるとはみているが、それでも密接なコミュニケーションやサポート関係にある。“最高の相棒”あるいは最も信頼できる友だちというレベルの関係である。依存レベルが高いため、一人で問題に対処するときには、困難を感じることもある。一卵性双生児2ペアと二卵性双生児1ペアが該当した。

③ 「分裂(分担)アイデンティティ」(split identity)

光と影のように両極的な役割分担になっている関係である。したがって、相互の結びつきには問題をはらんでおり、葛藤を潜在させた関係であるといえる。一卵性双生児3ペア、二卵性双生児3ペアがこのタイプだった。

④ 「理想化アイデンティティ」(idealized identity)

自分たちの双生児という関係を人生でも理想的だとするタイプである。このタイプは、双生児の深い親密さを“すばらしい”として重視するが、それは必ずしも深いレベルの結びつきを意味していない。一卵性双生児4ペアが該当した。

⑤ 「競争的アイデンティティ」(competitive identity)

双生児同士でお互いが基準になって競争する関係である。このタイプでは自我境界は明確化されており、かつ相互に親密であるが、お互いの達成と競争が意識されている。一卵性双生児6ペア、二卵性双生児6ペアが競争的アイデンティティに該当した。ともに対象者中で最も高い割合(各30%)を占めている。

⑥ 「きょうだいの愛着関係のアイデンティティ」(sibling attachment identity)

きょうだいの関係と似た関係である。男女双生児のみでみられた。競争も依存欲求も、関係の理想化も過剰に強くはない関係である。ただ、相手への共感性は高い。9ペアの男女双生児(二卵性)が、ここに含まれていた。

以上の論は、表現や関係の下位分類は多少ちがっているものの、ほとんど共通の考え方に立脚した双生児のアイデンティティ論だといえる。また、論を導いたケース分析などはあるものの、さまざまなアイデンティティのタイプを分けるに至った定量的な根拠は明確にされていない。

1-3-4. Schroeder (1989) の双生児のアイデンティティ調査

Schroeder (1989) は、30人の大学生双生児(一卵性15人、二卵性15人)のアイデンティティの特徴について、30人の非双生児対象者と比較をする質問紙調査を行なった。双生児群は女性27人と男性3人、非双生児群は女性26人と男性4人で、著しく女性にバイアスのある性比である。

使用された質問紙は、①青年用分離-個人化テスト(分離不安等の8下位尺度)、②エゴ・アイデンティティ状態の客観尺度-拡張版(Marcia, 1966; 1980のエゴ・アイデンティティ状態測定を質問紙化したもの)、③Erikson Psychological Stage Inventory (Rosenthal, Gurney, & Moore, 1981; Eriksonのアイデンティティ発達の段階仮説に基づく質問紙)。

結果では、25の尺度中いくつかで有意な差はみられたものの、ほとんどが小さな差であり、しかも予測された方向ではなかった。双生児群は、非双生児群にくらべて、健康な分離 (Healthy Separation) 得点がわずかに低く、アイデンティティのモラトリアム傾向得点がわずかに高いものの、一卵性双生児と二卵性双生児の差は、それとは逆方向にあった。

対象者の大多数が女性だという性別の偏りがあり性差の効果を分離できないなど、この結果は問題を含んでいる。Schroeder自身が結論したように、今後の研究をまたないと解釈も困難である。じっさい、われわれの調査は、双生児関係の親密さやアイデンティティの明確さは、性別要因が大きく働いているという結果を示すことになる。

2. 双生児の親密さ・アイデンティティに関する研究：一卵性双生児・二卵性双生児・きょうだい・友人関係のちがいを

2-1. 目的

双生児には、一卵性・二卵性のちがいだけでなく、女性一卵性、男性一卵性、男性二卵性、女性二卵性、男女二卵性というちがいがある。双生児であること (twinsip)、双生児の親密さやアイデンティティの特徴を扱った従来の研究では、不思議なことに、この基本的なちがいが考慮されないで検討が行なわれてきた。また、双生児関係が、他の同胞関係や友人関係などどのような差異があるのかも検討されてこなかった。これは、双生児関係自体がすでに特殊であるという素朴な発想によりかかって研究が進められてきたことに原因があるだろう。

ここでは、双生児の親密さとアイデンティティ形成の特徴を、①男性一卵性双生児、②女性一卵性双生児、③男性二卵性双生児、④女性二卵性双生児、⑤男-女二卵性双生児、⑥ (年齢の近い) 兄弟、⑦ (年齢の近い) 姉妹、⑧ (年齢の近い) 姉弟・兄妹、⑨ (いちばん親しい) 男性の友人、⑩ (いちばん親しい) 女性の友人という10種類の関係の中で比較することとした。このほかに、「異性の友人」という関係もあるが、関係の深さの分散が大きく範囲の限定が難しいため、研究対象からは除外した。

2-2. 方法

2-2-1. 調査参加者の募集

個人情報保護の問題があるため、なんらかのデータから双生児を無作為に抽出することはできない。そこで、第一著者が所属する東北大学と第二著者が所属していた東北福祉大

学のさまざまなネットワークを通じて双生児学生を探し、調査の目的を明確にして、電話連絡あるいは文書連絡を行い、最終的に参加の同意を得た。双生児については、そのペアの相手にも、同意による参加を求めた。第一著者が講義を行っていた宮城学院女子大学、宮城教育大学の学生についても、同様にして参加者を得た。また、第一著者の知人ネットワークにより新潟大学、東北学院大学ほかの大学においても同様な方法で参加者を得た。きょうだい関係についても、上記の大学での講義時や個人的な接触を通じて学生に協力を依頼し、その同胞からも同意を得た上で質問紙を送付した。きょうだいについては、年齢差が2歳以内のきょうだいに限定した。友人関係についても同様にして参加者を得た。友人関係は、「あなたにとって一番親しい同性の友人」との関係とした。質問紙の郵送調査のほか、双生児については電話によるインタビューで不明な情報を補足することもあった。

2-2-2. 調査参加者

最終的な参加者は、一卵性双生児合計27人、うち女性一卵性双生児14人（7組）、男性一卵性双生児13人（5組と3人）であった。二卵性双生児は合計18人、うち女性二卵性双生児6人（3組）、男性二卵性双生児6人（3組）、男女二卵性双生児6人（3組）であった。きょうだいは50人、うち姉妹22人、兄弟18人、姉弟または兄妹10人であった。親しい友人関係の参加者は50人、うち女性30人、男性20人であった。きょうだい、友人関係の調査参加者の性別比が、双生児の性別比と類似するように配慮して参加者を求めた結果である。年齢は、一卵性双生児群は18歳～24歳（平均21.37歳、SD1.50）二卵性双生児群は19歳～22歳（平均20.33歳、SD1.19）、きょうだい群は17歳～24歳（平均20.30歳、SD1.61）、友人群は18歳～26歳（平均20.32歳、SD1.65）であった。

この研究で、双生児の卵性診断について遺伝子情報を得ることは難しい。そこで、本人たちからの出生時情報のほかに、「卵性診断のための質問紙票」（日本版：浅香・山田，1983；天羽，1988）を確認のために使用した。この質問紙は、相手との外見の類似性、他者から間違えられた経験などを問うものである。合計得点の最小値は6点（最大類似）、最大値は20点（最大非類似）で、一卵性の場合14点以下になるのが97%、二卵性の場合15点以上になるのが91%と、高い判別率が報告されている。

本調査の参加者は、一卵性群のすべてが14点以下であった。これは本人からの出生情報と一致する結果であった。二卵性群では、9組7組は15点以上で、この情報からも二卵性である確率が高いことが確認されたが、2組は一卵性の基準値となる14点以下であった。この2組の得点はそれぞれ10点と11点であり、得点が極端に低い（最大類似）とはいえない

い。ここでは、本人情報にしたがって、二卵性群として扱った。

2-2-3. 質問紙

(1) 親密な関係尺度

この調査にあたって、双生児の親密さやアイデンティティの形成の程度についての質問紙「親密な関係尺度」を新たに構成した。項目の選定は、上に述べた双生児の親密さやアイデンティティに関する Ainslie (1985), Shave & Ciriello (1983), Siemon (1980), Schroeder (1989) の各所の記述のほか、天羽 (1988), 三木・天羽 (1956) にあらわれた双生児関係の記述を参考にした。さらに、われわれ著者二人とも一卵性双生児である個人的経験に基づいて項目を追加、尺度を構成した。それに加えて、双生児のアイデンティティ形成の特徴を明らかにするために、アイデンティティの希薄さに関する項目も尺度に含めた。

下位尺度は、先験的に、次の9尺度を想定した(結果の因子分析に基づいた尺度とは名称が異なる): ①一体性(項目例「いつも、ひとりではないような気がする」), ②親密さ(例「相手との関係は他の誰との関係よりも親密である」), ③意思疎通性(例「言葉には出さなくても、相手とはわかりあっている気がする」), ④独自性欲求(例「相手にない自分の能力や特徴を生かしたい」), ⑤相互依存性(例「相手が困っていると、すぐに手をかしたくなる」), ⑥共感(例「誰かが相手の悪口を言うと、自分がそう言われているような気がする」), ⑦分離欲求(例「相手がいなければ、もっと違う自分になれるかもしれない」), ⑧アイデンティティの希薄さ(例「自分がどういう人間なのか、わからなくなる」), ⑨競争性・比較(例「相手と自分が一緒だと、どちらかが主役で、どちらかが脇役になりがちである」)。各尺度8項目、合計72項目であった。

評定は、「1 全くあてはまらない～ 4 非常にあてはまる」の4段階である。

論文末の付録には、因子分析結果に基づいて作成した「親密な関係尺度」を、そのまま使用できるかたちで残した。

(2) 双生児であることへの反応, コミュニケーション頻度, 日常行動に関する質問

双生児については、親密な関係尺度の質問のほか、双生児であることへの反応などいくつかの項目について質問が行われた:

- ① 自分にとっての相手の存在の意味(自由記述)
- ② 相手と“離れた”と実感したとき、そのことへの反応(4項目5段階評定)
- ③ 双生児であることの満足度(非常に満足～非常に不満, 5段階評定)

このほか、コミュニケーションの頻度、他の友人との関係など、いくつかの質問が設けられていたが、考察に加えないものは省略する。

2-3. 結果と考察

2-3-1. 「親密な関係尺度」の因子分析

「親密な関係尺度」の回答について、因子分析を行なった。全72項目について、まず主因子法によりバリマックス解を求め、固有値1以上の因子を抽出すると、18の因子が抽出された。しかし、この解は因子の解釈が困難で、5つのタイプの双生児関係をきれいに分離するものではなかった。そこで、因子数を指定し、順次、解を求めていったが、5因子解が最も解釈が明確で、かつ5つのタイプの双生児関係が明確になるものであった。5因子による累積寄与率は、33.17%（それぞれ、13.11, 7.06, 4.99, 4.29, 3.74）と低かったが、群別の因子得点の散布図を描いてみると群のちがいの意味が分かりやすいものであった。以下は、5因子解による結果について述べることにする（表1参照）。

第1因子の負荷量の大きな項目は、「いちばん自分の力になってくれるのは、相手だと思う」、「自分を一番理解してくれるのは、相手だと思う」などで、「親密さ」因子と命名された。第2因子の負荷量の大きな項目は、「自分の行動やその結果を、いつも相手を比較してしまう」、「相手のことを、ライバルとして見ることが多い」などで、「競争」因子と命名された。「ライバル因子」としてもよいだろう。第3因子の負荷量の大きな項目は、「相手とはちがう世界で、自分の道を歩みたい」、「相手と距離をおいて生活したい」などで、これは「分離欲求（束縛感）」因子と呼んでおく。第4因子の負荷量の大きな項目は、「自分が何者であるか、はっきりつかめない」、「自分がどういう人間なのか、わからなくなる」で、「アイデンティティの希薄さ」因子と呼ぶことにする。第5因子の負荷量の大きな項目は、「相手が成功すると、自分のことのようにうれしい」、「相手が病気やケガをすると、自分もつらい」などで、これは「共感」因子と呼ぶのがふさわしい。

表1 「親密な関係尺度」の因子分析結果 (5 因子)

因子名	項目例 (各因子5項目)	因子負荷量
第1因子 「親密さ」	<ul style="list-style-type: none"> • いちばん自分の力になってくれるのは、相手だと思う。 • 自分を一番理解してくれるのは、相手だと思う。 • 相手は、他の誰よりも相談しやすい。 • 相手は、誰よりも頼りになる存在である。 • うれしいことや楽しいことは、まず相手に報告したい。 	.822 .799 .768 .762 .762
第2因子 「競争」	<ul style="list-style-type: none"> • 自分の行動やその結果を、いつも相手を比較してしまう。 • 相手のことを、ライバルとして見ることが多い。 • 相手がいるために、自分は思うように行動できない。 • 相手に劣等感や優越感を感じることもある。 • 何かをするとき、相手だったらどのようにしたり考えたりするだろうと思うことがよくある。 	.702 .627 .624 .613 .536
第3因子 「分離欲求」 (「束縛感」)	<ul style="list-style-type: none"> • 相手とはちがう世界で、自分の道を歩みたい。 • 相手と距離をおいて生活したい。 • 相手と離れていると、のびのびした気持ちになる。 • 相手と離れた土地に住みたい。 • 自分は、相手とちがう人間でありたいと思う。 	.683 .682 .651 .613 .601
第4因子 「アイデンティティの希薄さ」	<ul style="list-style-type: none"> • 自分が何者であるか、はっきりつかめない。 • 自分がどういう人間なのか、わからなくなる。 • 自分というものが、くるくる変わって、つかみにくい気がする。 • 自分は一人の独立した人間だという気がしない。 • 人生をどのように生きたいかを、自分で決められない。 	.789 .743 .733 .620 .617
第5因子 「共感」	<ul style="list-style-type: none"> • 相手が成功すると、自分のことのようにうれしい。 • 相手が病気やケガをすると、自分もつらい。 • 相手が叱られたり、責められたりしたときには、自分がそうされているような気がする。 • 相手が困っていると、すぐに手をかしたくなる。 • 相手に何かが起こったとき、じっとしていられなくなる。 	.586 .552 .530 .523 .513

2-3-2. 関係のタイプによる「親密な関係尺度」の因子得点のちがい

この5つの因子得点について、10種類の関係のタイプ (一卵性女性双生児, 一卵性男性双生児, 二卵性女性双生児, 二卵性男性双生児, 二卵性男女双生児, 男性きょうだい (兄弟), 女性きょうだい (姉妹), 男女きょうだい (姉弟・兄妹), 女性友人, 男性友人) を要因とする一要因分散分析を行なった (表2参照)。その結果, 第2因子の「競争」以外の因子では, 関係群の効果は有意 (親密さ, 分離欲求, 共感) または, 有意傾向 (アイデンティティの希薄さ) であった。

表2 関係群別の平均因子得点および分散分析結果

因子 関係	親 密 さ	競 争 (ライバル)	分 離 欲 求 (束縛感)	アイデンティ ティの希薄さ	共 感
一卵性(女)	0.47	-0.02	0.59	0.03	0.32
一卵性(男)	0.17	-0.08	0.30	-0.17	-0.21
二卵性(女)	1.34	0.10	0.03	-0.96	0.59
二卵性(男)	-1.18	0.11	0.08	-0.87	-0.68
二卵性(男女)	-1.09	-0.58	-0.04	-0.47	-0.76
きょうだい(女)	0.50	0.08	-0.28	0.00	0.36
きょうだい(男)	-0.89	0.08	0.47	0.23	0.03
きょうだい(男女)	-0.74	-0.16	-0.76	0.14	0.60
親しい友人(女)	0.35	-0.22	-0.11	0.32	0.15
親しい友人(男)	-0.16	0.47	-0.17	0.01	-0.83
<i>F</i> (9, 135)	10.31	0.94	2.18	1.88	4.06
<i>p</i>	<0.0001	ns	<0.05	=0.059	<0.0001

(1) 親 密 さ

親密さ得点では、関係群の主効果が有意であった。同じ双生児でも一卵性双生児と二卵性双生児のちがいが際立っていた。親密さの平均因子得点は、女性の二卵性双生児群が全群の中で最も高い。これに対して、男性二卵性双生児群が、親密さの平均因子得点は最も低い。一卵性双生児の平均は、男女ともに全群の間であるようにみえるが、他の群と著しく異なる特徴を持っている。この点は、親密さと分離欲求を2つの軸とした散布図のところで詳しく述べることにする。

(2) 競争(ライバル)

群の主効果は統計的に有意なものではなかった。しかし、「男性友人群」の因子得点は全群中最も高かった。男の友人同士はライバルでもあるとしばしばいわれるが、結果は、そのことを示していた。

(3) 分離欲求(束縛感)

各群の特徴は、分離欲求と親密さを2つの軸とする散布図のところで、詳しく述べる。

(4) アイデンティティの希薄さ

これまで多くの研究者や臨床家は、双生児の親密さがアイデンティティの形成の障害

となると考えてきた。結果は、その逆だった。アイデンティティの希薄さは、表2および図1からも分かるように、一般に非双生児群が著しい。双生児のアイデンティティは、むしろ相対的に明確である。

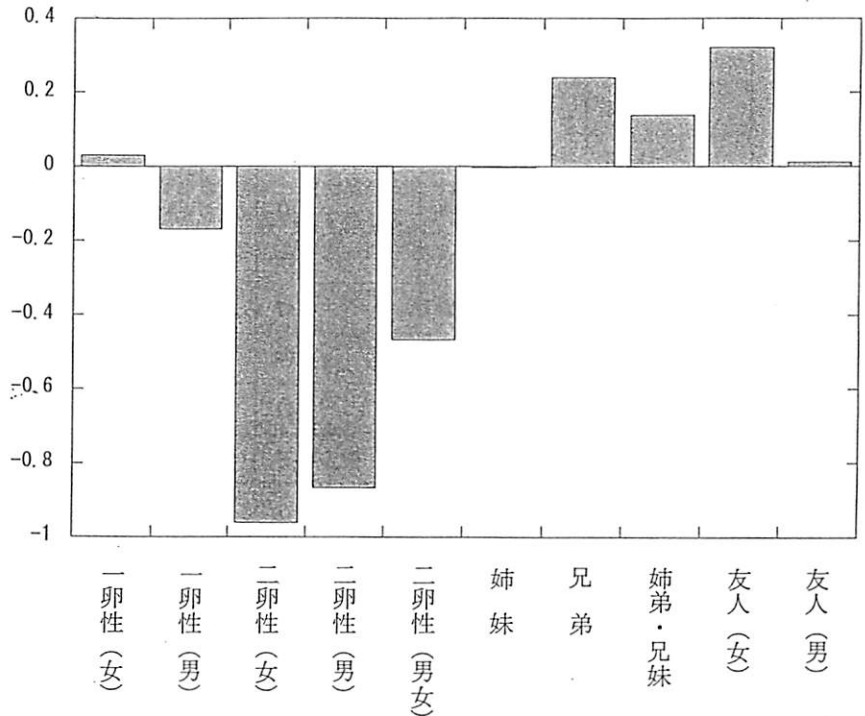


図1 「アイデンティティの希薄さ」平均因子得点

プラスの数字は「アイデンティティ」の希薄さを示している。マイナスほど、相対的にアイデンティティが確固としたものであることを示す。因子得点なので、ゼロは絶対的なアイデンティティの希薄さの midpoint を示しているのではなく、あくまでも全体での平均を示すものである。

(5) 共 感

関係の中での共感性の高さは、関係のタイプよりは性別によって単純に規定される傾向があった。女性が男性よりも一般的に高い(表2)。姉弟・兄妹で「共感」平均因子得点が高いのは、姉弟・兄妹の女性の得点が高いことに由来している。一般に女性の共感性が高いのは、従来の共感性研究の結果に合致する。

2-3-3. 「親密さ」と「分離欲求(束縛感)」因子得点の散布図からみた群の特徴

「親密さ」と「分離欲求(束縛感)」は、表面的には反対のものであるとも考えられてしまうかもしれない。しかし、バリマックス解が直交解であることからわかるように、

両者は独立なものであった。親密でありながら、束縛感を感じ、心理的物理的距離をとりたいと感じることは、なんら矛盾するものではない。親密さと分離欲求（束縛感）をそれぞれXY軸とする散布図を個人について描いてみると、5種類の双生児関係がどのような特徴を持っているかさらに明瞭になった。

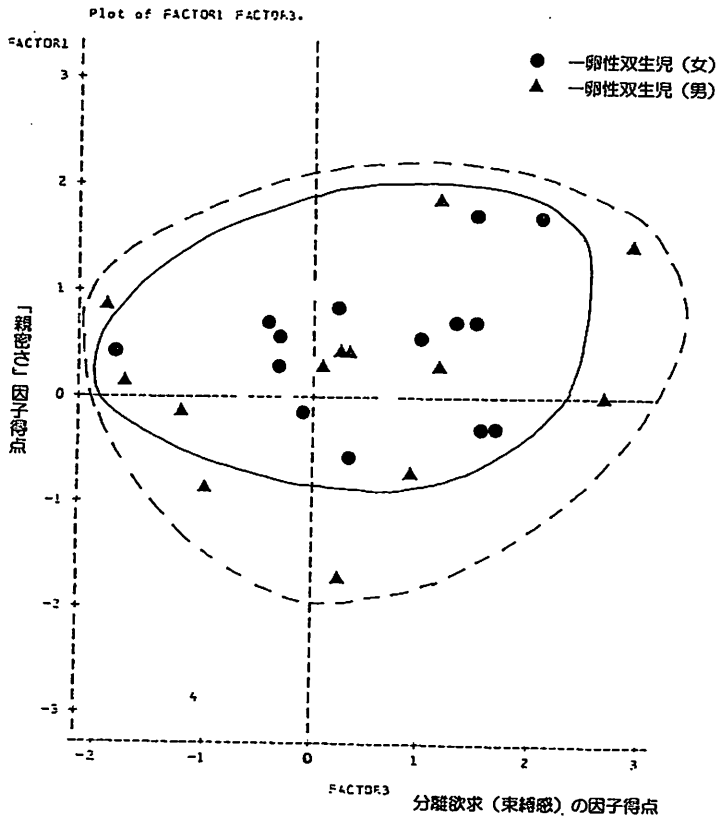
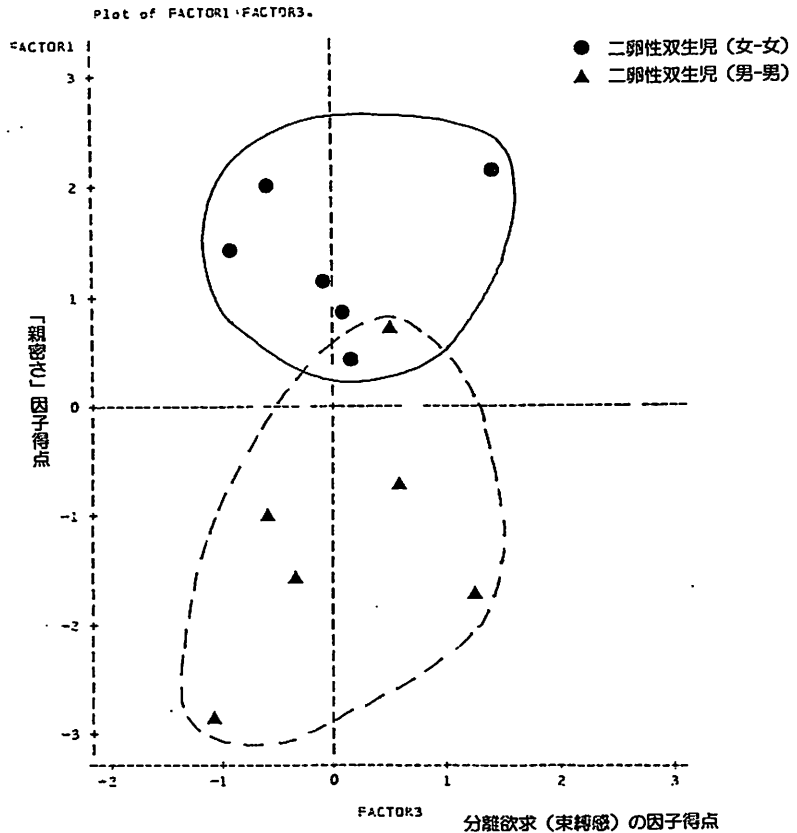


図2 男女一卵性双生児の「親密さ」因子得点と「分離欲求（束縛感）」因子得点の散布図（一つひとつのマークは、それぞれ個人を示している。因子得点の0点は、絶対的な「親密さ」や「分離欲求」の中点を意味するのではなく、あくまでも全体の群の平均点を示している。以下も同様。）

(1) 女性一卵性双生児と男性一卵性双生児（図2）

一卵性双生児の特徴は、まず男女ともに親密さの高低と束縛感の高低の組合せがさまざまに分散していて、個人差が大きいことである。親密さがきわめて高く、かつ束縛感を感じない密着した関係にある者。(Schave & Ciriello (1983) の一体化アイデンティティに相当するといえる)、親密ではあるけれどそこに束縛感を持ち分離したいと感じる者、親密さが低く分離欲求もない者、親密ではないのに束縛感を感じるという矛盾した感情

を持つ者と、関係は多様である。さらに、もう一点の特徴は、男女の分布がほぼ重なっていることである。相互に物理的・心理的類似性も高く、幼少期にはつねに心理的・物理的に近い関係にあった一卵性双生児は、青年期にはその密着性に対する反応から、このような多様な関係へと分かれていくと考えられる。分離欲求の分散も大きい。その意味で、双生児関係はストレスフルな関係であるともいえる。ただし男性一卵性双生児の分散は、女性一卵性双生児よりも大きくなる傾向がみられる。



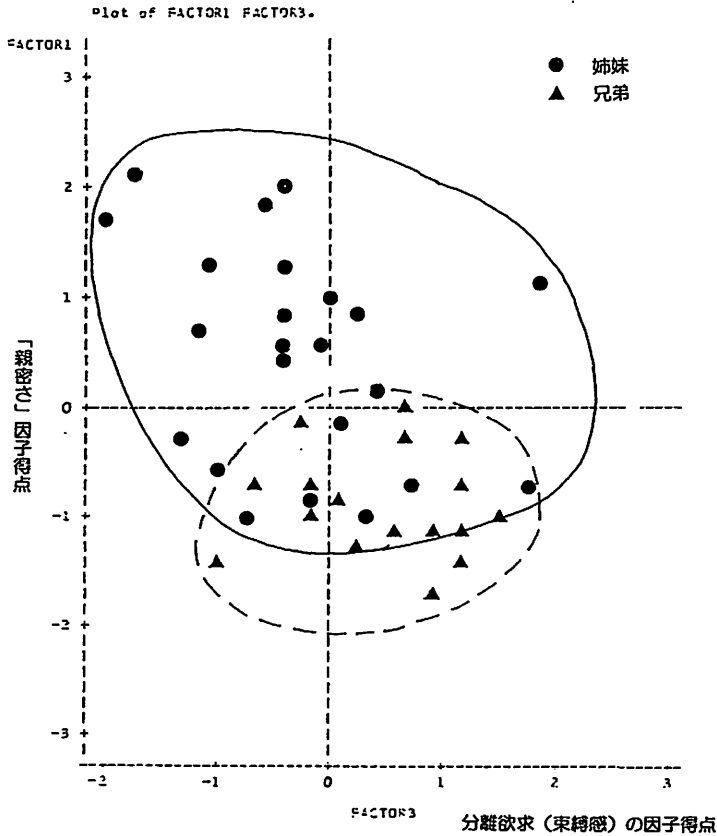
(一つひとつのマークは、それぞれ個人を示している)

図3 男女二卵性双生児の「親密さ」因子得点と「分離欲求 (束縛感)」因子得点の散布図

(2) 女性二卵性双生児と男性二卵性双生児 (図3)

この関係は、二卵性双生児になると様相が一変する。男女の分布が、きれいに、ほぼ分離してしまうのである。女性同士の二卵性双生児は親密さが高い方に偏って、男性同士の二卵性双生児は親密さが低い方に偏っている。このことは、一卵性双生児同士の関係と二卵性双生児同士の関係が著しく異質なものであることを示唆している。この点は、

後で双生児関係に対する反応の分析のところで、あわせて考察をする。従来の双生児関係で、明瞭な結果がみられなかったのは、性と卵性をそれぞれ分離しない研究・分析手続きに由来していると考えられる。



(一つひとつのマークは、それぞれ個人を示している)

図4 非双生児の兄弟・姉妹の「親密さ」因子得点と「分離欲求(束縛感)」因子得点の散布図

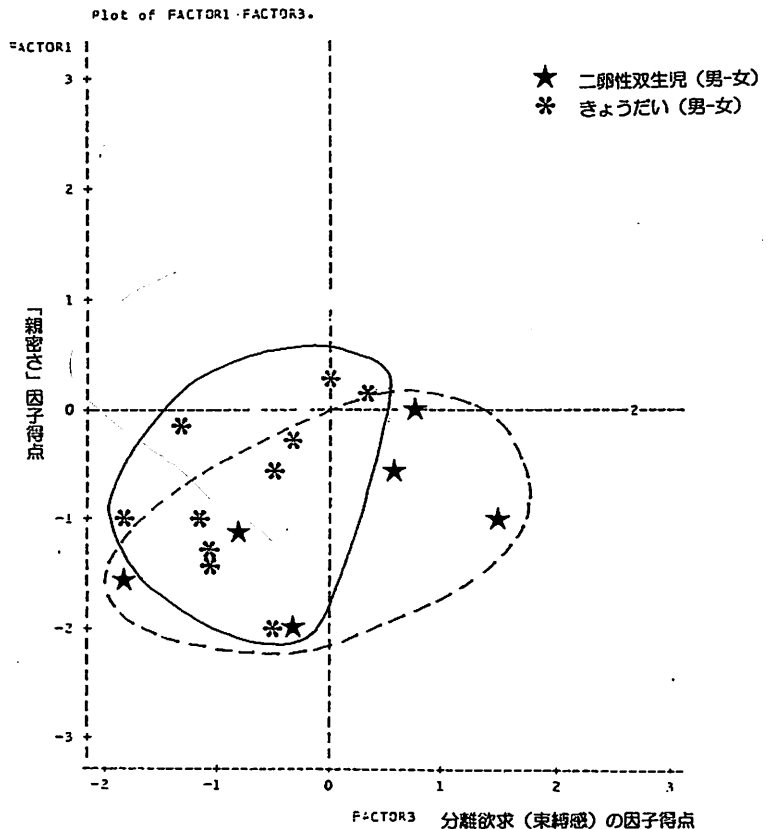
(3) 非双生児の兄弟・姉妹 (図4)

双生児ではない、年齢が近い同性同士の兄弟と姉妹の「親密さ」の差は、一卵性双生児の性差と二卵性双生児の性差の、ちょうど中間になっている。極端ではないが、やはり「姉妹」の方が親密な傾向があり、「兄弟」はあまり親密ではない方に偏る。また、分離欲求(束縛感)は、姉妹の方が兄弟よりも少ない傾向がみられる。

非双生児姉妹の分布の重なりと非双生児兄弟の分布の重なりは、およそ三分の一程度

である。この重なり の程度は、一卵性双生児の男女がほとんど分布が重なっているのと、二卵性双生児で男性と女性の分布がほとんど重ならないのとの中間だといえる。

このようにしてみると、男性同胞の関係のうちでは、一卵性双生児だけが例外的に非常に親密なケースも存在することが分かる。



(一つひとつのマークは、それぞれ個人を示している)

図5 異性のきょうだいと異性の二卵性双生児の「親密さ」因子得点と「分離欲求 (束縛感)」因子得点の散布図

(4) 年齢が近い異性の同胞 (きょうだい) と異性の二卵性双生児 (図5)

異性同士のきょうだい (姉弟・兄妹) や双生児 (二卵性) は、他の関係に比べて「親密さ」が低い。インセスト・タブーという点からも、うなづける結果である。しかし、ここには興味深い傾向がみられる。「異性の男女きょうだい」では、親密さが低く、かつ分離欲求 (束縛感) が少ない傾向がある。「自然に距離がとれている」関係という表現ができるかもしれない。それに対して「異性の二卵性双生児」では、「親密さ」が低

いにもかかわらず、分離欲求（束縛感）が強いケースがでてくるのである。やや無理に距離をとろうとしているといえるケースなのかもしれない。

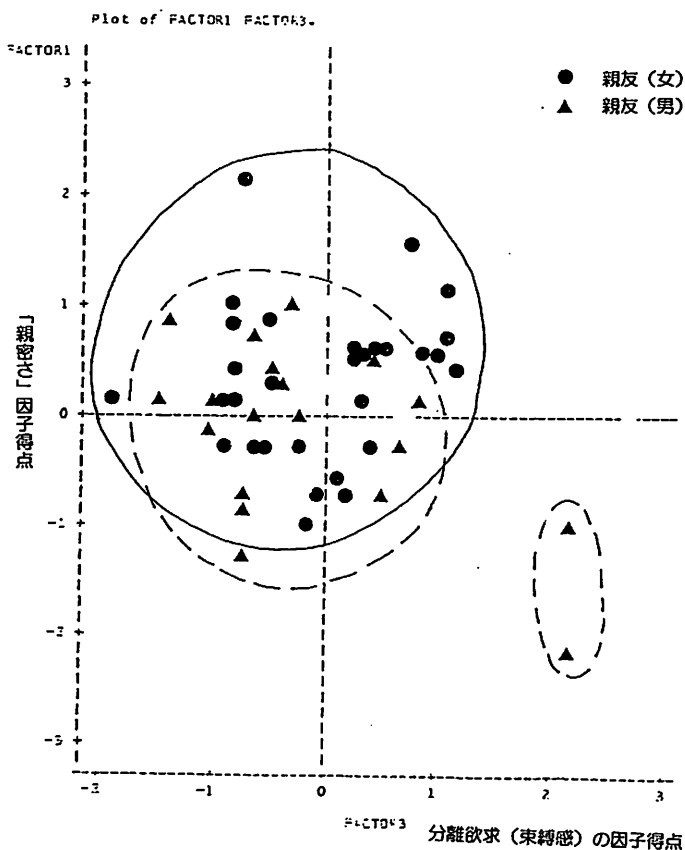


図6 親しい女性友人と親しい男性友人の「親密さ」因子得点と「分離欲求 (束縛感)」因子得点の散布図

(5) 親しい友人 (図6)

「いちばん親しい友人」は、男女ともに、ある程度親密な方に分布する傾向がみられる。親密さの性差は、二卵性双生児や異性きょうだいほどの差ではないが、わずかに女性の方が親密さの平均因子得点が高めである。ただし、有意なものではない。男性友人で、例外的に、二人だけ束縛感もつよくて親密さも低い者がみられる。何かわだかまりがある関係なのかもしれない、友人関係の崩壊過程にあるケースである可能性が考えられる。

2-3-4. 双生児であることへの反応：「男性二卵性双生児」の特異性

親密な関係尺度の分析からは、同じ双生児でも、一卵性・二卵性、男・女によるちがいが著しいことが明らかになった。一卵性双生児は、男女とも同様に、親密さと分離欲求の個人差が大きく、関係が多様だった。これに対して、二卵性双生児では、女性双生児の親密さの平均因子得点が全群中でも最も高かったのに対して、男性双生児の親密さは最も低く、両者の分布はほとんど重ならなかった。この結果は、双生児であることへのさまざまな反応の分析結果を考え合わせると理解しやすい。

(1) 双生児であることへの満足感

双生児であることへの満足感の質問では、「5非常に満足」から「1非常に不満」までの5段階で評定が求められていた。この中で、女性二卵性双生児の満足度(平均4.14)は、最も高い。逆に、男性二卵性双生児は、双生児であることへの満足度が最も低かった(表3参照)。「どちらでもない=3」の満足度からすると、二卵性双生児(平均2.83)のみが、不満に偏った反応である。多重比較では、同じ男性でも、男性一卵性双生児と男性二卵性双生児の間には有意な満足度の差がみられる。これは、「親密さ」因子得点の結果とも対応している。

表3 双生児であることへの満足度

(1非常に不満～5非常に満足)

	一卵性(女)	一卵性(男)	二卵性(女)	二卵性(男)	二卵性(男女)
平均評定値	4.14	3.46	4.50	2.83	3.00
(SD)	(0.95)	(1.13)	(0.55)	(0.75)	(0.63)

$$F(4, 40) = 4.42, P < 0.01$$

(2) 相手から“離れた”と実感したときの感情

双生児であることへの反応等の質問では、「相手から離れたという実感」を持ったのはいつか、複数の選択肢から選択を求めた。具体的には、「ちがう学校に通い始めたとき」、「ちがう住まいになったとき」、「クラブなどちがうことをはじめたとき」、「相手と考え方にちがいを感じはじめたとき」、などであった。これらは、個々の事情により左右されていたが、この質問に加えて、「相手と離れたことを、そのときにどう感じたか」、「不安」「さびしさ」「解放感」「独立感」の4種類の感情について、「0全く感じなかった～4非常に強く感じた」までの5段階評定も求めた。そのうち、「さびしさ」については、表4のような有意な群の効果がみられた。不安については、有意境界の効果($p < 0.10$)がみられたが、さびしさと全く同じ群間の関係であった。この感情も、男性二

卵性双生児が最も低い。関係がなくなって、さばさばしたという感じさえある。

表4 相手から“離れた”と実感したときの感情（「さびしさ」）

(0 全く感じなかった～4 非常に強く感じた)

	一卵性（女）	一卵性（男）	二卵性（女）	二卵性（男）	二卵性（男女）
平均評定値	1.92	1.42	2.83	0.17	0.83
(SD)	(1.38)	(1.24)	(0.52)	(0.41)	(1.33)

$F(4, 48) = 4.48, P < 0.01$

女性二卵性双生児は、全群の中で最も親密さが高く関係にも満足している。なぜ、これとは逆に、男性二卵性双生児は最も親密さが低く、関係にも不満足で、相手から離れたと実感したときさびしさを最も感じないのだろうか。ここには、二つの要因が関与していることが仮定される。

一つは、同性密着への抵抗である。この同性密着への抵抗は、日本の大学生での身体接触研究でも男性同士が忌避するというかたちでの強い性差がみられる（仁平・残間, 1997）。同様に今回の精神的な親密さにおいても、女性では基本的な同性密着への抵抗がうすく、逆に男性では同性密着への抵抗が高いことが考えられる。

さらに、二卵性双生児は、双生児とはいうものの、一緒に生まれた「きょうだい」にすぎない。外見の類似性も、一卵性双生児とはちがって、きょうだい間程度の類似性である。それなのに、外部からは「双生児」だとして扱われることになる。じっさい、双生児であることへの反応のうち「双生児であることのマイナス」を聞いた質問に対して、ある男性二卵性双生児は「いつも一緒だと思われる」ことをマイナスである点としてあげている。本人にすれば、一緒に生まれたきょうだいなのに、これは不当なことである。

「自分にとって相手はどのような存在か」という質問に対して、たとえば「良き相談相手」（男性一卵性双生児）、「近くにいなくても相手が存在することだけで安心できる」（女性一卵性双生児）、「良きパートナー、一番信頼できる」（女性二卵性双生児）などのようにどちらかといえばポジティブな表現をとっている割合は、女性一卵性双生児が85.7%、男性一卵性双生児53.8%、女性二卵性双生児100%である。これに対して、男性二卵性双生児は0%である。とくに二卵性双生児では、「ただの兄弟でしかない」など、たんに「兄弟」という表現をとっているのが6人中4人（66.7%）である。二卵性双生児にとっては、相手は「ただの兄弟でしかない」のに、外部からは「双生児」だと扱われる不当な関係なのである。女性二卵性双生児の場合は、おそらく女性の特徴で

ある密着への抵抗のなさがある。それゆえに女性二卵性双生児では、きょうだい並みの類似性でしかないことは類似性がきわめて高い一卵性双生児の場合のような自己の独自の存在の脅威にもならず、逆に関係をプラスのものとして肯定する結果につながるのかもしれない。

3. 総合考察

3-1. 双生児のアイデンティティ

双生児であることがアイデンティティ形成に障害になるというこれまでの仮説とはちがって、われわれの調査結果は、むしろ双生児では相対的に確固としたアイデンティティ形成が行なわれる傾向があることを示していた。

従来の双生児のアイデンティティ論は、どちらかといえば臨床的なケース研究に依拠するところが多かった。臨床的なケースは、ときとして、われわれの眼をくまますことがある。アイデンティティに問題を生じた双生児の臨床例を経験したとき、それがあたかも双生児一般の典型であるかのように思ってしまう危険性があるからである。45人の双生児という限られた数ではあったが、われわれの定量的な研究は、これまでにない双生児関係の複雑さを示す結果になった。

単生児は、そのまま一人の独自の存在として生まれる。しかし、双生児は、とくに一卵性双生児は、出生のその最初の時点から、類似性の点からも、あるいは双生児という扱ひの上からも、安易な外部の目からは独自の一人の存在としてではなく一組の者として見られることがある。その意味で、独自の唯一無二の存在になるためには双生児は努力を強いられる。そのため、自分が何者であるかという確固とした感覚、あるいは独自の一人の存在であるという感覚を生み出すアイデンティティの問題には、双生児は早期から直面しているともいえる。こうした事情が、双生児のアイデンティティ形成をむしろ促進する結果になったと考えられる。アイデンティティは、自然に形成されるものではなく、たえざる努力の連続の結果であることは、Eriksonの指摘するところでもある。アイデンティティが確固としたものであることは、青年期までの双生児の個人化の過程が容易であったことを必ずしも意味しないと考えられる。逆にその過程が困難であったからこそ、アイデンティティをより強固に形成する必要があったと考える方が、より合理的だろう。親密さとうらはらな分離欲求(束縛感)を、青年期でもなお強く持っている双生児が少なからず存在するという今回の結果も、それを裏づけている。

3-2. 親密な関係尺度

今回の親密な関係尺度は、先験的に想定した9次元72項目のものよりは、因子分析結果に基づいた、より少ない項目の尺度の方が使い勝手がよいと考えられる。当初の尺度には、双生児のアイデンティティを検討するための項目が含まれていた。因子分析でも、このアイデンティティの希薄さについての下位尺度は、独立した因子として抽出された。しかし、双生児に限定しないで親密な関係を測定しようとするには、アイデンティティに関する下位尺度は不要である。

そこで、親密な関係を測定するための尺度として、巻末に「親密な関係尺度」を添付した。下位尺度は、「親密さ(2・8・12・14・17)」「競争(3・7・13・18・19)」「分離欲求・束縛感(4・6・10・15・20)」「共感(1・5・9・11・16)」である。項目は、下位尺度ごとにまとまらないようにランダムになっている。各項目がどの下位尺度に属するかは、論文中の表1でも確認できる。各下位尺度5項目ずつの合計20項目の短縮版である。質問紙のタイトルは「あなたと相手の方との関係についての質問」としてある。

表5 「親密な関係尺度」(短縮版) : 関係のタイプ別の尺度平均得点(5項目単純合計得点: min=5, max=20: 12.5がほぼニュートラルの得点), 下位尺度の信頼性(Cronbackの α)

関係 \ 尺度	親密さ	競争 (ライバル)	分離欲求 (束縛感)	共感
一卵性双生児(女)	14.0(SD2.1)	11.2(SD3.6)	12.9(SD2.9)	15.9(SD2.5)
一卵性双生児(男)	13.6(SD3.8)	10.3(SD3.3)	12.5(SD4.6)	14.2(SD3.1)
二卵性双生児(女・女)	17.2(SD2.9)	10.8(SD4.8)	11.8(SD1.8)	16.8(SD1.7)
二卵性双生児(男・男)	8.7(SD3.6)	9.5(SD5.2)	11.5(SD2.9)	10.2(SD2.0)
二卵性双生児(女・男)	8.8(SD2.9)	8.5(SD3.7)	11.8(SD4.5)	10.3(SD3.3)
きょうだい(女・女)	14.5(SD4.0)	11.0(SD2.2)	10.6(SD2.9)	15.5(SD2.5)
きょうだい(男・男)	9.9(SD1.8)	10.5(SD3.1)	12.8(SD2.7)	12.7(SD2.1)
きょうだい(女・男)	10.3(SD2.7)	9.6(SD2.5)	9.6(SD2.5)	14.8(SD2.2)
親しい友人(女・女)	14.5(SD2.8)	11.0(SD3.0)	11.0(SD2.3)	14.9(SD2.3)
親しい友人(男・男)	9.5(SD3.0)	11.7(SD3.0)	11.2(SD3.3)	11.8(SD2.6)
Cronback's α	.894	.787	.773	.795

この20項目版による各下位尺度の信頼性（内的整合性：Cronbackの α ）と平均得点は、表5の通りである。 α は4尺度とも.75を超える。どの下位尺度も使用に耐える信頼性係数である。

ある程度以上に親密さが高い関係について研究するには、この尺度は有効であると考えられる。双生児でも、きょうだい、友人、恋人でもよい。また、夫婦についても適用可能である。ただし注意を要するのは、これまで結果で問題にしてきた因子得点は、全体の平均をゼロとするものであり、因子得点の0が絶対的な「親密さ」や「競争」「分離欲求」「共感」の中間点ではないことである。今回の調査で扱ったのは、もともと親密さが高い対象者群である。したがって因子得点がマイナスであっても、普通の対人関係からすればある程度は親密な関係である。各下位尺度の平均合計得点が12.5点の場合（各項目の評定値が、2.5）が、ほぼ高いとも低いともいえない中間にあたる。親密な関係の多様な問題が扱える尺度である。

付記)

調査結果の一部は、日本心理学会第56回大会（1992）において、「双生児・きょうだい・親友—その関係の相違—」（仁平義明・大平直子）というタイトルで報告した。研究に協力いただいた対象者の皆様、石田幸平先生、大山正博先生、村井則子先生、仁平道明氏、大平明子氏、また学会の発表セッション直後に数時間にわたり双生児研究についてディスカッションをいただいた安藤寿康先生に、こころからの謝意を表すものである。

文 献

- Ainslie, R. C. (1985) *The psychology of twinship*. University of Nebraska Press.
- 天羽幸子 (1988) ふたごの世界—双生児の二十五年間の追跡研究—。ブレーン出版。
- 浅香昭雄・山田一朗 (1983) 環境と遺伝。周産期医学, 13, 879-883.
- 安藤寿康 (1999) 「遺伝と教育—人間行動遺伝学のアプローチ」風間書房。
- Erikson, E. H. (1963) *Childhood and society* (2nd Edition). W. W. Norton & Company. (仁科弥生訳『幼児期と社会』(1,2) 1977 みすず書房)
- Kuntay, A., Gulgoz, S., & Tekcan, A. (2004) Disputed memories of twins: How ordinary are they? *Applied Cognitive Psychology*, 18, 405-413.
- Marcia, J. E. (1966) Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Marcia, J. E. (1980) Identity in adolescents. In J. Adelson (ed.) *Handbook of adolescent psychology*. New York: Wiley.
- McCartney, K., Harris, M. J., & Bernieri, F. (1990) Growing up and growing apart: A developmental meta-analysis of twin studies. *Psychological Bulletin*, 107, 226-237.
- 三木安正・天羽幸子 (1956) 双生児の行動特徴と兄弟間にみられる性格のちがいについて。内村祐之編『双生児の研究第Ⅱ集』日本学術振興会。243-257.

- 仁平義明 (1992) アイデンティティの意味. (未刊行講義資料)
- 仁平義明・残間理恵 (1997) 親子の身体接触に関する研究(1)-大学生と親の身体接触に対する反応の因子構造-. 日本心理学会第61回大会発表論文集, 233.
- Rosenthal, D. A., Gurney, R. M., & Moore, S. M. (1981) From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, 10, 523-537.
- Savić, S. (1980) *How twins learn to talk: A study of the speech development of twins from 1 to 3*. Academic Press.
- Schroeder, C. (1989) A dissertation submitted to Loyola University. UMI Dissertation Information Service.
- Shave, B. & Ciriello, J. (1983) *Identity and intimacy in twins*. Praeger Publishers.
- Siemon, M. (1980) The separation-individuation process in adult twins. *American Journal of Psychotherapy*, 34, 387-400.

付録：「親密な関係尺度」

この質問紙は、本研究の72項目版の分析に基づいて作成された。青年期中期から後期にかけての対象者の親密な関係、双生児同士の関係、兄弟姉妹・親しい友人との関係を調べるのに使用できる。恋人・夫婦の関係について適用すると新しい知見が得られる可能性がある。関係が親密なときだけでなく、「分離欲求(束縛感)」も含まれているので、関係に問題が生じているときとの比較にも適していると考えられる。ただし、最初から親しくない関係を見るのには向かない。「親密さ」「競争(ライバル)」「分離欲求(束縛感)」「共感」の4下位尺度各5項目。

「あなたと相手の方との関係」についての質問

あなたと「相手の方」との関係についておたずねします。

以下の文を読んで、あなたと相手の方の関係について、あなたの現在の気持ちに「1全くあてはまらない」から「4非常にあてはまる」まで、そう思われるところの数字を○で囲んでください。

1. 相手が叱られたり、責められたりしたときには、自分がそうされているような気がする。
(1全くあてはまらない・2あまりあてはまらない・3ある程度あてはまる・4非常にあてはまる)
2. 相手は、他の誰よりも相談しやすい。
(1全くあてはまらない・2あまりあてはまらない・3ある程度あてはまる・4非常にあてはまる)
3. 相手に劣等感や優越感を感じることもある。
(1全くあてはまらない・2あまりあてはまらない・3ある程度あてはまる・4非常にあてはまる)
4. 自分は、相手とちがう人間でありたいと思う。
(1全くあてはまらない・2あまりあてはまらない・3ある程度あてはまる・4非常にあてはまる)
5. 相手が困っていると、すぐに手をかしたくなる。
(1全くあてはまらない・2あまりあてはまらない・3ある程度あてはまる・4非常にあてはまる)
6. 相手と離れた土地に住みたい。
(1全くあてはまらない・2あまりあてはまらない・3ある程度あてはまる・4非常にあてはまる)

7. 相手のことを、ライバルとして見ることが多い。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
8. いちばん自分の力になってくれるのは、相手だと思う。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
9. 相手に何かが起こったとき、じっとしていらなくなる。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
10. 相手と離れていると、のびのびした気持ちになる。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
11. 相手が成功すると、自分のことのようにうれしい。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
12. 相手は、誰よりも頼りになる存在である。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
13. 自分の行動やその結果を、いつも相手を比較してしまう。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
14. うれしいことや楽しいことは、まず相手に報告したい。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
15. 相手と距離をおいて生活したい。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
16. 相手が病気やケガをすると、自分もつらい。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
17. 自分を一番理解してくれるのは、相手だと思う。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
18. 相手がいるために、自分は思うようには行動できない。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
19. 何かをするとき、相手だったらどのようにしたり考えたりするだろうと思うことがよくある。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)
20. 相手とはちがう世界で、自分の道を歩みたい。
(1 全くあてはまらない・2 あまりあてはまらない・3 ある程度あてはまる・4 非常にあてはまる)

Intimacy and Identity in Twins: Myths and Facts

Yoshiaki NIHEI

Naoko OHIRA

We compared the characteristics of intimacy and identity of adolescent twins with those of non-twin siblings and intimate friends. Twenty-seven identical twins, 18 fraternal twins, 50 non-twin siblings, and 50 intimate friends filled in a questionnaire on intimate relationships. The results revealed that the relationships between twins differ from those between non-twin siblings, or intimate friends. Moreover, contrary to traditional assumptions, identities of twins were found to be more firmly formed than singletons'.